

連載③
内海善雄の
(ITU前事務総局長)
やぶ睨み
「ネット社会」論

ミャンマー訪問で見た
中韓に出遅れた日本への期待

七月下旬、情報通信産業の関係者と一緒にミャンマーを訪問した。ミャンマー商工会議所と共催でワークショップを開催するなど、産業界の方々はもちろん、科学技術大臣や郵政大臣とも意見を交換する機会を得た。民主化の進展で経済封鎖も解かれ、ミャンマーの大きなポテンシャルに各国の期待が高いが、メディアではあまり報道されない実情を知ることができた一週間であった。

行動が伴わないブーム

ミャンマーでは日本のビジネスマンが急に津波のように押し寄せ、半年前と比べてホテルの宿泊料金が数倍にも跳ね上がったという。東京とヤンゴン間の直行飛行便も運航されることになり、日本人によるミャンマー・ブームである。

しかし、ご多分に漏れず、日本は中国、韓国、そしてアメリカの後塵を拝しているのが実情だ。ウ・テイン・ウー・ミャンマー・コンピュータ連盟会長はワークショップの中で、「大勢で来て、調査し、議論をしても、行動を起こさない日本人」と、歯がゆく述べた。ヤンゴン市内を見て一番に感じることは、ちょうど二、三十年前のタイとよく似た風景であることである。高いビルはほとんどなく、道端の露天商なども健在。文化的にもタイと似ており、二、三十年前のバンコックにいるような錯覚を覚える。

走る車は十年以上も前の日本の中古車。時間が止まっているかのような印象を受ける。風景は異なるものの、キューバで感じた印象と同じである。

ミャンマーは人口六千万人、日本の半分ぐらいで、ほぼタイと同じである。面積は日本の約二倍、国境地帯以外は平地であるから、耕地可能な土地は広大である。ちょうど中央に位置する首都ネピドからヤンゴンまで五時間を車で走ったが、見渡す限り平地であった。人家はほとんど見えなかったため、この大地だけでも農業資源として大変な可能性が

あることが分かる。地下資源では、鉄、スズ、鉛のほか、宝石類が豊富で、石油と天然ガスも産出される。しかし、人口の半数以上がいまだ農林漁業に従事しているという。人工首都ネピドの壮大さにも驚かされる。その広さはブラジリアやキャンベラの比ではない。八車線の広い道路が交差する首都では、隣の建物(官庁)へ行くのに車で何十分もかかるという、途方もない、常識を疑わざるをえない規模である。軍事政権の権力が絶大なものであったことが容易に想像できる。

経済発展の可能性が高い

比較的に新しい科学技術省は、大臣以下、われわれにも友好的な雰囲気の中であった。一方、歴史のある郵政省は、訪問客のわれわれも直立して大臣の入室を迎え入れさせられ、同席の幹部が大臣の質問に直立不動で返答するなど、極めて権威的な役所の雰囲気であった。

両大臣とも同じ国軍出身だが、役所によってこれほど違いがあることに、民主化の進捗が一樣ではないことが想像された。同時に、両省とも「日本に留学した」と声を掛けてく

る幹部が大勢いることはまことに心強い。統計上は一人当たりGDPが八百三十ドルと、世界で百五十四位であるから、アフリカの極めて貧しい国と同レベルである。しかし、国民は貧しさを感じさせない服装や礼儀正しい立ち振る舞い、街角や職場の雰囲気も同様である。おそらく為替レートのため統計的に現れた数字は低い、実質的には中程度の開発途上国であることは明らかである。

高校や大学の授業は英語で行うとのことで、英語を話す者が多く、いったん舵を切ると国際化が極めて容易であることが想像できる。一方、頭脳流出も容易で、大量の若者がシンガポールなどに流出している。

ミャンマーは経済封鎖が行われていた間、隣国の中国やインドと交易を行っていたのでいた。そのせいか、中国規格の建物や道路な



「日本」の姿はまだまだ見られない

ど、中国の影響が至る所で見られる。インフラ整備も大きく中国に依存しているが、問題を抱えている。例えば電力では中国が発電所を建設してくれたが、発電した電力の90%は中国に回すことになっていて、国内は電力不足であるとのこと。

中国にとってはインド洋への出口となるミャンマーは、インド、中国、タイに隣接し、地政学的に重要な位置を占める。現に中国海軍の基地が、ミャンマー本土の南、ベンガル湾の大ココ島(ミャンマー領)にある。

欧米には従わなかったツケ?

韓国の経済援助も相当進んでいるようで、科学技術省では、中国や韓国が立派なIT研修設備を作ってくれているのに、なぜ日本ができないのかと、強く求められた。IT教育を行う大学が十六もあるとのこと、とても開発途上国とは思えないほど人材開発を行っているようである。

地下資源があり、多数の人材がいて、タイと同様の経済発展が期待できるミャンマーが、軍事政権の下、人権が侵されているというだけで、なぜ欧米は経済封鎖まで行ったのだろうか? 軍事独裁政権下の中東諸国とどこが異なったのだろうか? 旧英領ではあったが、他の英植民地と異なり英国に反抗し続けた歴史のミャンマーは、従順であったインドと比



内海善雄(うつみ よしお)

1942年香川県高松市生まれ。東大法学部卒。東芝を経て66年郵政省(現な通産省)入省。電気通信の自由化など、通信放送政策を長く担当。98年国際電気通信連合(ITU)事務総局長就任。現在は財団法人「海外通信・放送コンサルティング協力」理事長。早稲田大学客員教授。

較して英国から常に冷遇された。旧日本軍の支援の下、やっと独立することができたので、ミャンマー人の中には、反英(反欧米)感情と親日感情が強い。軍事政権と闘ったアウンサンスーチー氏は英国留学の英国風の人物で、必ずしも全国民の共感を博していたとはいえないという。どうも欧米マスコミが創り上げたヒロインのような気がする。

このような状況の下で、電話の普及率が数%、インターネットもようやくつながらない貧弱な通信インフラに、これから民間資本の導入が始まる。品格のある日本のODAと日本企業の参画が大きく期待されている。

帰りの飛行機で隣に座った米国人はブッシュ前大統領に近い人物で、なんと日本のJBIIC(国際協力銀行)のために走り回っていると名乗った。米国王尊の経済封鎖が解かれたばかりのミャンマーに、日本の政府関連資金をめぐって米国のロビイストが活躍しているとは、うかうかしておれない国際社会の象徴的な一面であった。